

アルパック ニュースレター



美方町温泉保養館「おじろん」登場

アルパック ニュースレター もくじ

1993年1月1日

- あけましておめでとうございます…………… 2
- 私の「おじろん物語」…………… 5
- 福知山市雲原 二巨人による村おこし…………… 8
- 良き隣人とは……………10
- 主婦たちによる無農薬食堂「がやが舎」……………11
- ハウステンボスの知られざる一面……………12
- 新刊旧刊書評紹介……………13
- 電柱の緑化?……………14

NO. **57**

あけましておめでとうございます。

ニュース・レター 10年の新年

代表取締役会長 三輪 泰司

このニュース・レターは、1982年の名古屋事務所創設を契機に、1983年7月に第0号発刊をもってスタートしました。昨年11月14日、名古屋事務所創設10周年記念の地域交換会をご好評の内に行うことができました。皆様方のご支援の賜と深く感謝申し上げます。

ニュース・レターも今年で満10歳になるわけです。

10年前、京都・大阪・九州に中部圏が加わり、とても足しげくお訪ねしたり、お手紙を差し上げられる寸法を越えました。ご無礼を償わせていただく方法は、と考へまして、自分達の実力とも相談し、隔月にお手紙をさせていただきます。隔月にお手紙をさせていただきます。隔月にお手紙をさせていただきます。隔月にお手紙をさせていただきます。

この間、1988年に東京事務所を開設し、またこれらの地域事務所の他に、専門型事務所もつくってきました。今後は新しい組織も加わってくることでしょう。

自分達で体験したり、知ったことを、手紙のつもりで書いていますので、どうぞお気軽にお読み下さい。また、お返事や小言をいただければ、一層幸せです。この種の仕事は人と人とのふれあい、情報と情報の交流にこそフロンティアがあります。様々なジャンルの刺激とそのためのコミュニケーションを大切にしたいと思います。

“地球環境”も一時のフィーバーのように僅か半年で霞んでいます。私達はこの10年、環境・経済・技術・文化を基礎に“産官学の連合”“地域自治圏のあり方”“新しい技術開発”等をテーマにしてきました。コミュニケーションの「種」にさせていただきたく、今年もよろしく願い申し上げます。

交流・発信・連携・展開

代表取締役社長 金井 萬造

昨年は世界や日本の大きな変化が続いた年でありましたが、アルパックの重点は、一昨年に引き続き基礎固めの年でした。

アルパックでは、昨年は名古屋イヤーとして名古屋事務所の開設10周年事業を行うと共に、本社企画推進部の発足（専従所員1名、兼任若干名）などに取り組みました。

また、フォーラムや学会などの催しのお手伝いを通じて社会との交流に努めてきました。

さらに、本来の業務の品質を確保していくために、若手をはじめ各種の研修教育や研究開発の体制の充実をはかりました。

仕事の面だけでなく、ゆとりと人間性のあるアルパックを目指して、所員の自発性に基づく、アルパック・バンドといったサークル活動やコンペ・研究会への所員の自主参加も進み、今後の展開が楽しみです。

その結果、各事務所の体制の充実と共に、本社・各事務所の諸企画が多重的に展開できるところに、ようやく、たどりついた感があります。

今後は、これらの取組みを、より一層、進めると共に、研究情報誌の発刊や技術交流など業務の品質向上と情報発信活動を重視し、事務所間や業界・学界などとの連携を強めていきたいと思っています。

また、広域連携企画など、各種企画の展開をはかります。

最後になりましたが、皆様方のますますの御健勝をお祈りすると共に、さらなる御指導・御支援を心からお願い申し上げます。

今年もよろしくお願ひ致します。

新たなチャレンジをめざして

名古屋事務所長 尾関 利勝

昨年はアルパック名古屋10周年にあたり、皆様方にいろいろとご協力いただき、おかげ様で各種の事業を行う事ができました。ありがとうございます。

これを機会に、事務所環境の改善の一環として、事務所の5階に都市交流サロンとして独立した会議室を設け、居心地の良い環境で各種のネットワーキングにご利用いただいております。

11年目にあたる本年は、様々な意味でアルパック名古屋の転換点にすべく、努力していく所存です。10周年にちなみ発行しました地域計画・名古屋特集の中にありますように、トークセッションで各種の示唆をあたえられました。多極的な視座から地域とまちを見詰め直し、リアルタイムな現実的対応とともに長期の都市総合学への貢献を目標に、データ構築とネットワーク形成に向けて、努力してまいります。今後とも引き続き、ご支援をお願い申し上げます。

チャレンジ精神で時代創造をめざす

京都事務所長 山口 繁雄

「経済大国」から「生活大国」へというキャッチフレーズのもとに、豊かな国民生活の実現をめざしたさまざまな方策が検討されています。しかし、経済社会の低迷、環境問題への関心の高まり、高齢化の進展等が進む中で、豊かな国民生活像を早急に現実のものとしていくのはなかなか容易なことではないように思われます。

特に、私どもがかかわっております都市計

画や地域計画の分野におきましては、環境と共生・調和する開発のあり方はどうあるべきなのか、今後の地域経済を牽引するリーディング産業はどのようなものになるのか、豊かな地域生活像はどのように描けるのか等、これまでの経験だけでは解明しにくい問題が山積してきています。

この難問題に対処していくには、チャレンジ精神を発揮して創造的な業務を推進していくしかないと思います。本年も御指導・御支援をよろしくお願ひ致します。

関西で光るシンクタンクをめざして

大阪事務所長 杉原 五郎

大阪事務所は、昨年4月以降9名の新入所員を迎え、本社機能を含めて39名の所員数となりました。厳しい社会経済情勢ではありましたが、経営基盤を強化しながら業務実績を着実に積み重ねるとともに、所外の専門家などとの協力・連携により、地球環境パネル展をはじめ各種の学会活動や研究会活動など多彩な社会活動を展開することができました。

いま、大阪事務所は、新入所員を含めた若手所員の新鮮な感覚と行動力、中堅所員の粘り強い努力と探求心、経営幹部の経験と幅広い視野などが相まって、さらなる飛躍のときを迎えています。今年は、都市計画、住宅計画、環境計画、景観計画、交通・港湾計画、地域振興計画、事業計画及び再開発計画、建築計画などの分野において、“関西で光るシンクタンク”となることを目標に、きびきびとした活気のある事務所づくりをさらに進めていきたいと思ひます。本年も引き続き、ご指導ご支援をよろしくお願ひ申し上げます。

あけましておめでとうございます。

もう一步の足跡を積み重ねていきます

東京事務所長 斎藤 侑男

東京事務所が開設されて、今年で6年目に入ります。この間に、高齢者住宅の部門では、地域高齢者住宅計画、シルバーハウジングプロジェクト等を担当させていただき、現在民間借り上げ高齢者住宅の工事監理もおまかせいただいているところです。地域計画から建築までという、アルパックの一番おおもとのスタンスを実現しているということができま

す。これが、事務所内外の皆さんのお引き立て、ご援助の賜と深くお礼申し上げます。

東京圏はとてつもなく広く、また、優れた人達、優れた事務所が沢山あります。アルパック東京事務所としては、本社や各先輩事務所のようなオールラウンドな展開はひとまずにおいて、専門の領域、担当させていただく地域などのテーマを一つ一つ実現して、皆様のお役に立てるコンサルタント事務所になっていけるよう、今年も頑張っていきたいと思えます。よろしく願い申し上げます。

(株)九州地域計画研究所より

副所長 山田 龍雄

我が社も九州に事務所を構え、早や16年、(株)九州地域計画研究所としては8年目を迎え、現在、スタッフ9名で行っていますが、4月にはメンバーを3人増やし、さらに起動力を発揮したいと考えています。

5年前から取り組んできた「九州北部学園都市構想」も推進段階に入り、構想推進会議が産官学で設置されました。

昨年はコミュニティ住環境整備事業や公営

住宅等の建替え計画をはじめ、住宅・住環境整備の事業計画のお手伝いをする機会が多く、まだ住宅や住環境の悪い地域が多く残されているのを痛感した次第ですが、今年は良好な都市ストックとしての住宅や街という切り口で住宅計画のコンセプトが考えられないかと思っております。

今年もできるだけ事例研究などの「仕入」を行い、サービス提供と業務遂行に役立てていきたいと考えています。

今年もご支援のほどお願いします。

(株)アルパック・インターナショナルより

代表 霜田 稔

アルパック・インターナショナルも早4年を迎えます。比較的面白い仕事でスタートしましたが、バブルの影響でしょうか苦労をしています。アルパックの協力と支援を得て、今後も積極的に展開したいと思っています。昨年から、都市開発やまちづくりも元気ありませんが、21世紀の関西創生のためにも、今新たな「情念」を必要としています。新た

な情念は、個人の生きがいや地域への愛着から生まれます。今年は「地域学会」といったコンセプトで色々な方々との出会いをしたいと考えています。学研都市を核とする京滋奈地域や京阪沿線地域、阪神地域、さらには自分の住む乙訓地域学会、また、個人的にも関係するテキサスや韓国・中国地域に関心を向けていきたいと思えます。

ローカルでグローバル、これは私の情念ですし、また、A I I の I D にもしてまいりたいと思っています。今年も宜しく願い致します。

(株)都市居住文化研究所の近況

代表取締役所長 道家 駿太郎

昨年1年間で都住研の陣容も一回り大きくなり、業務のはばも広がってまいりました。

道家、北条、朝日、川上のコアスタッフを中心として各種開発企画から建築設計、事業化計画までフルラインで対応が可能になり、神島、桃菌(旧姓渡辺)に加え、新たに一級建築士の重松、企画アシスタントの張、設計アシスタントの山田の3名が入社し、総勢9

名でフル回転をしています。

社会的活動の面では、道家、北条がJIA京都部会の役員を、道家が設計監理協会理事、そして京都デザイン協議会主催の第13回京都デザイン会議実行委員長の役を任じられるなど日々忙しくしております。

本年は都住研創立5周年にもあたり、あらためて創立時の気持ちを思い起こし、専門家集団の機動的組織として今後ともがんばりたいと思っております。

今後とも宜しくお願ひいたします。

私の「おじろん物語」

一美方町温泉保養館「おじろん」オープナー 高坂 恵治

昔々のことです。

町で育ったバーバヤンは、重い重い鞆をさげて小代村に通っていました。バーバヤンは田舎の人々に紙屑を売って暮らしていました。

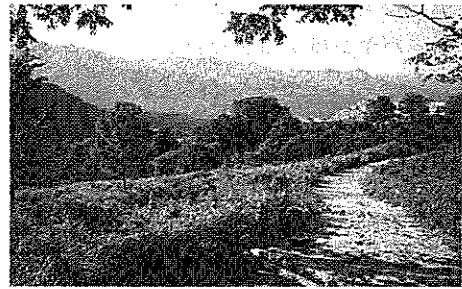
彼の紙屑は「魔法の紙」と言われるほど、智恵が沢山つまった紙として、田舎の人々にとても喜ばれていたのですが、時々はいい加減な紙屑を売って村の人々を騙すこともありました。

小代村は雪深い山奥の小さな村です。冬になると村は白い雪に閉ざされて、代官でさえこの村があることを忘れてしまいました。村の人々は炭を焼いたり、出稼ぎに行き春が来るのを待っていました。

その年はいつもよりずっと早く村へ雪がやって来ました。

「今年はこれでおしまいとするか。」

バーバヤンはそう呟きながら、降りしきる雪の中を歩いていきました。峠を越える頃には雪はひざまで積もり、陽はすっかり西に傾



バーバヤンが通ったとされる峠の道

いて辺りは暗くなってきました。さすがのバーバヤンも不安になってきました。雪がバーバヤンの歩くはずの道を覆い隠しています。僅かな雪明かりだけが頼りでした。

バーバヤンはとうとう道に迷ってしまいました。どうしたら村にたどりつけるのか、彼にはわかりません。寒さは羽織った蓑を買い替えてバーバヤンを凍てつかせます。

凍えたバーバヤンの足は、もう彼のいうことを聞いてはくれません。雪の中に座りこんでしまったバーバヤンは、鞆の中の大切な紙屑を出すと、火打ち石で火をつけ燃やしはじめました。

ぽっと明るくなった雪の向こうに、町に残してきた4人の幼い娘達の顔が、浮かんでは消えていきました。

鞆の中の紙屑が燃え尽きてしまうころ、バーバヤンはウトウトしはじめました。もとより居眠りを得意としているバーバヤンです。紙屑を売り歩いているときでさえ、お客さんの前で居眠りを始めることすらありました。「ここで寝てしまおうたら、二度と娘たちに会えへんようになる。」

けれど、睡魔は後から後から襲ってきて許してくれません。



何かとても温かい夢を見ていたような気がします。

「こっちゃ来いやー。」

夢の中で誰かが呼んでいます。

「こっちゃ来いやー。」

バーバヤンはノロノロと顔をあげようとしていました。バーバヤンの体にはすっかり雪が降り積もっていました。笠にも蓑にも、バーバヤンの睫毛にも。

「こっちゃ来いやー。」

やっとバーバヤンは眼を覚めました。雪はまだ降り続いています。紙屑はとうに燃え尽きてしまい、辺りは真っ暗で方角すらわかりません。

「こっちゃだぞーっ。」

バーバヤンは凍えた体に鞭打つように、声のする方へ歩きだしました。

どの位歩いたのか、枯れ枝に顔をひっかかれ、傷だらけになっても、バーバヤンは痛みを感じることはありません。

突然バーバヤンの周りが温かくなったような気がしました。見ると一面が湯気に包まれています。

「温泉?!」

凍えた手でもどかしそうに着物を脱ぐと、バーバヤンは目の前の湯気に向かって飛び込みました。体の表面からゆっくり溶けだし、やがて芯までとろけるような気分でした。

人心地つくと、バーバヤンは自分と呼んだ声が気になりだしました。湯気の中で目を凝らして辺りを見ても誰もいないようでした。

わずかに雪を踏む音がしたようでしたが、それもしだいに遠ざかり、やがて聞こえなくなってしまいました。

温泉は岩の間からいくらかでも湧いてくるようでした。

いつしか雪もやみ、朝日が東の山に顔を覗かせる頃、バーバヤンはすっかり元気を取り戻していました。一晩中温泉に浸かっていたのです。ほてった体には、小代村の冷気はむしろ気持ち良く感じられます。

まったく不思議なことです。顔の傷はすっかり治っていて、肌が生き活きしているようでした。バーバヤンは手拭いを出して体を拭こうと着物の方を見ると、着物は蓑の下にきちんとたたんでしまわれていました。まわりには、わずかに足跡が見られるようでしたが、雪が積もっていてそれも定かではありませんでした。

バーバヤンは着物を着ると、見覚えのある山の方へ歩いていきました。やがて、小代の村に着きました。村長の二吉どんが心配顔でバーバヤンを迎えてくれました。

二吉どんの家で温かい粥と、大好きな漬物を御馳走になりながら、バーバヤンは昨晚の不思議な体験を語って聞かせました。

「わしは、爺さまに聞いたことがある。」

二吉どんは爺さまに聞いた話をしはじめました。

「爺さまが童子わらしだったころのことじゃ。その頃から、この村では牛を飼っておったんじゃ

が、時々、牛に悪戯をするもんがおるっちゅうことで、村の若いもんが皆して捕まえようとしたことがあったそうじゃ。ん？ どんな悪戯だった？ そいつは、何やら牛に飲ませているということじゃった。

何日も、皆交替で夜も番をしたそうじゃが、とうとう捕まえることはできなんだそうじゃ。もちろん、そいつの姿を見たもんは誰もおらん。悪戯はそれから後も続いたそうじゃが、不思議なのはそれだけではないのじゃ。」

二吉どんは、だんだん楽しいことを話すような顔になってきました。

「悪戯は1年続いたそうじゃ。村のもんは、牛が悪い病にでもかかるといふんじゃないかと心配しておったんじゃが、次の年の牛市の時、小代の牛は味がええと、えらい評判になったということじゃ。悪戯はそれっきりうなってしまったそうじゃが、小代の牛の評判は今も続いているというわけじゃ。村のもんは、そいつのことを『おじろん』と呼んでいたそうじゃ。」

「それからの、『おじろん』は、村にやって来るよそもんには親切じゃという噂があっ

ての、よそもんとおつきあいは大切にせにゃならんと、わしら教えられたもんじゃ。それが、小代の村の言い伝えになったんじゃな。」

二吉どんの話聞いて、バーバヤンは昨晩吹雪の中で助けてくれたのは、きっと、そのおじろんに違いないと思いました。そして、おじろんが牛にのませていたのは、あの温泉だったのではないかと。

その日の午後、バーバヤンは燃やしてしまった紙屑のお詫びに、二吉どんをはじめ、村の人々をあゝ温泉の場所に連れていきました。バーバヤンの凍えた体を温め、顔の傷を治してくれたあゝ温泉です。もちろん、そこにはおじろんの姿はありませんでした。

それ以後、この温泉は『おじろん温泉』として村の人々に親しまれたということです。

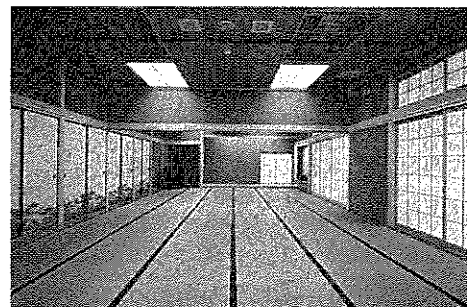


こんな「おじろん物語」を思い描きながら足掛け3年通った兵庫県美方町に、おじろんゆかりの温泉保養館「おじろん」が、昨年、11月1日完成し、オープンしました。

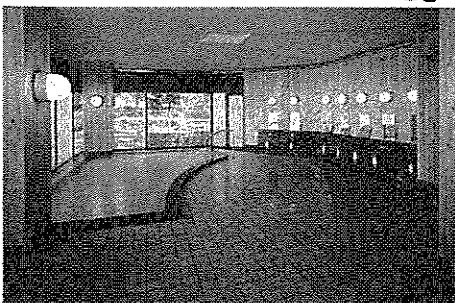
過疎を背負い友としてきた、小さな町の一大事業の幕開けです。



ロビー



大広間「三友の間」



「流水の湯」他に「行雲の湯」もあります。



屋上テラスとラウンジ

美方町のまちおこしについては、本紙55号にて馬場がご紹介しております。

第一期の「おじろん」は、大浴場・うたせ湯・サウナを中心に、ゆっくりくつろげる大広間、それに湯上がりに一杯楽しんでいただけるラウンジを用意しました。まずは、町の方々に充分楽しんでいただきたいと思います。そして、かつておじろんがそうしたように、「おじろん」流のやり方で「よそもん」をもてなしていただきたいと思います。

現在第2期工事として、薬湯を楽しめるク

リスタル風呂の建設に取りかかっており、今年初夏には完成を予定しています。

この原稿を書き終えたら、また美方町にでかけます。今度はおじろんがどんな話を展開してくれるでしょうか。

お話しは終わりました。賢い読者の方々はすでにお気づきのことと思います。この物語はフィクションですが、登場する人物名や仕事は、実在する人物や仕事といささか関係があります。

(大阪事務所 こうさか けんじ)

～泰さんのあんな京都こんな京都⑩～

福知山市雲原 二巨人による村おこし

山田 泰造

京都府北部・福知山市字雲原は、市の中心部から北へ20km、三方を山に囲まれ95%が山林で耕地は僅か60ha、人口 449人・戸数 131戸（平成2年）の寒村です。昭和9年9月室戸台風により壊滅的打撃をうけましたが翌10年1月西原亀三が全村民の期待を担って村長に就任し、内務省土木局赤木正雄との出会いが契機となって、災害を起こさない砂防事業と、先進的な農村改造事業が行われました。巨人西原と赤木との出会い（敬称略）

西原氏は、明治6年6月雲原に生まれ、子供の頃東京に出ます。やがて寺内正毅の知遇を得て、大正6～8年寺内内閣の私的特使として日中間を往復し、北京政府総理段祺瑞と総額1億4,500万円に及ぶ世にいう西原借款を締結しました。昭和に入り宇垣内閣の成立に奔走し、2・26事件後12年1月大命降下するも軍部の協力得られず流産。西原は遂に故郷に帰る決意をし、村長に専念します。室戸台風の災害の惨状を直視して、西原は二度と災

害を起こさない工法を求め京都府庁を尋ね、内務省赤木技師に会う事を勧められます。10年3月赤木に会い現地調査を熱望し、4月現地案内。赤木は災害箇所ごとに対策を説明します。その時西原は、昭和10年度の予算は既に配分済みである事を知り「予算の事は自分に任されたい」と、直ちに大蔵大臣高橋是清を訪ね、砂防の急務を説き、大臣も全く同感と共鳴し、第二予備金から京都・兵庫・鳥取・島根・岡山に 135万円の支出を決定しました。当時の砂防補助費も 135万円であり、いかに大英断であったかがうかがわれます。又これが今日の国庫補助砂防事業の素因となる大きな意義をもつものになりました。又赤木が「屈曲した谷川は護岸の上からも直流とするのが良いが、山村は耕地乏しく僅かの流路変更も苦情が出る。雲原も同様であろう」西原は即座に「耕地の問題は少しも考えるに及ばぬ。技術上最も良い方向に流れを改めてくれ」と注文し日頃抱いていた農村改造計画を

昭和30年以降の雲原地区

30～40年代の都市への人口の流出により、雲原にも過疎化の波が押し寄せていました。一方、50年代まで年々相当額の工事費を投入してほ場整備や集落道路の改良が行われましたが、昭和初期事業の延長・補完をなすものといえましょう。一方当時の住民の最大の念願は国道 176号福知山－雲原間の拡幅整備でした。事業は59年に完了し、福知山との交通事情は一変し、最近工場の進出も見るにいたり、住民要望は下水道整備へ、生産増強から環境改善へと大きく変わりつつあります。

現在、国も自治体も一体となってふるさとづくりに、ハード部門だけでなくソフト面まで多種多様な事業を推進しています。雲原は福知山の近郊農村として立地条件が大きく変わり、環境と景観に恵まれた地区となりました。今後よき指導者の下に特色ある村おこし事業が行われ、栄光に満ちた地区となる可能性を予知する次第です。

資料 西原亀三自伝 夢の七十余年
赤木正雄 砂防一路
中村 治 雲原地区農村整備の今昔
(京都事務所 やまだ たいぞう)

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

良き隣人とは —高齢者住宅管理人の悩み—鈴木 美加

「シルバーハウジング・プロジェクト」。
この制度は、公的賃貸住宅において、自活可能な高齢者のみの世帯を対象に、高齢者に配慮した設計の住宅と、ライフサポート・アドバイザー（L S A）と呼ばれる管理人の活動をあわせて提供する制度で、建設・厚生両省によって実施されている。

東京都でも、さらに立ち退きなどの深刻な住宅事情により、公的住宅に限らず民間建設の住宅を自治体が借り上げる場合も含む「シルバーピア」が進められ、L S Aと同様の活動を行うワーデン（管理人）がおかれている。

この管理人の役割は、入居高齢者の“良き隣人”として同一建物内に居住し、入居者の生活相談や緊急時の対応などを行うこととなっている。しかし、どれくらいの時間、どのような活動をどの程度行うかについては、自治体や管理人ごとで活動レベルが違っている。

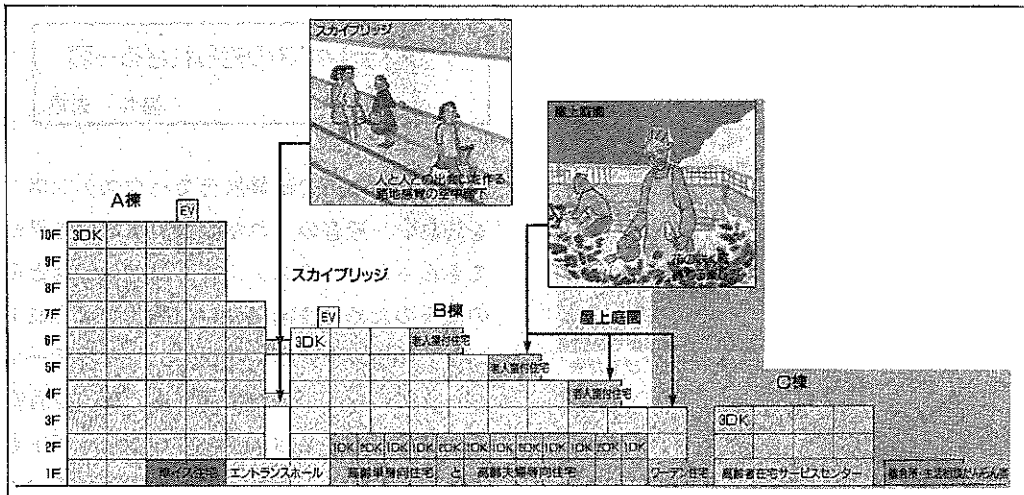
活動の中で、特に神経を使うといわれている「緊急時の対応」は、高齢者住戸にある緊急用のナースコールや、一定時間入居高齢者

の動きがないときに作動するシステムにより発せられた通報に対して関係機関へ連絡するのだが、「一日の一定時間をみるだけで、後は隣接する養護老人ホームが対応してくれる社会福祉法人立住宅」もあれば、原則24時間体制で「外出時は常に不安がつきまとい、睡眠中も頭のどこかが起きていて、家族一緒に旅行などとても出来ない」といった大変な活動となってしまっている事例もある。

また、日常生活の補助活動となるとさらに活動範囲が難しくなる。入居当初の設備の説明から始まり、生活相談、電球の取り替え、疾病時の買物・調理などの生活援助。あげくの果ては、疾病時に看病に来たお嫁さんを「私には管理人がいるから」と追い返し、結局管理人が看病せざるを得なくなった例もある。“良き隣人”としての活動は、限りない。

しかし、これらの活動を管理人だけがしていくことは不可能である。今後、入居高齢者の疾病や加齢に伴う身体の弱化は避けられず、入居高齢者の中に「管理人が面倒をみてくれる」という気持ちがあるならば、管理人の活動は増え続ける一方である。

そこで、管理人に負担がかかりすぎず、入居高齢者が自立した生活を送るには……。



シルバーピア東堀切の構成 (出典 パンフレット)

自治体が入居高齢者に対して「管理人にも生活があります。できるだけ入居高齢者同士で助け合って生活する気持ちを持ってください。」と強調した事例。また、管理人自らが「管理人に頼るのではなく、自分達で助け合って生活してください。私はそのお手伝いをします。」と交流会などを中心とした活動を行っている事例もある。

生きてきた歴史の違う人達が一つ屋根の下で暮らし始めるのだから、交流や相互扶助なんて決して簡単にできはしない。けれど、共に助け合って暮らしていく気持ちが育てば、みんながお互いの“良き隣人”になっていくのではないだろうか。

(東京事務所 すずき みか)

主婦たちによる無農薬食堂

「がやが舎」 大石 陽子

福岡市郊外の志免町というところに、ボランティア活動を行っている主婦11人が集まる1階建ての小さな建物があります。

ここに集まる主婦たちは、平成3年11月に地域で行われたリサイクルバザーで知り合ったメンバーで、お互いの価値観等を話し合う

うちにみんなで何かをやってみようということになったそうです。

そこで5つの憲章をつくり、11人で「がやが舎」を設立し、自分達で改築し、現在食堂を運営しています。

名前の由来は、「がやがや」と話をしているうちにできて、地域の人達と仲良く「がやがや」やって、コミュニティ広場の1つにしたいとのことでした。この食堂では、無農薬・無添加物をうたった「おふくろの味」のお弁当や、デザートを食べさせてくれます(お惣菜持ちかえりも出来る)。また、そのかわらテーブルのまわりには、地域の人達が持ち寄ったりリサイクル商品や、手作り人形、バックなどのバザーも行っており、地域の人達とのコミュニティ広場という目的は充分に果たしているようでした。

メンバーは、ボランティア活動にも忙しく、一週間の勤務割りを作って分刻みで活動しているとのこと、この勤務割りが一番大変ということです。また今後は、自分達の畑を持ち、野菜なども自分達で作るその材料でお弁当をつくりたいとのことでした。

ここで働く人達は、今のところ時給 300円



自分達で改築した「がやが舎」



バザーコーナー

がやが舎（憲章）

1. お互いの個性や価値観を尊重し、人と人との係わりを大切にします。
2. 女性の感性とエネルギーを生かし、人間的な働き方を通して女の自立を目指します。
3. 環境問題に取り組み資源のリサイクルに努めます。
4. 農薬や添加物を意識して、生を育み「食べ物」を作ります。
5. コミュニティ広場として生活文化の発展に努め、住みやすい地域社会づくりを心がけます。

で頑張っています。このことは、自分達の余った時間を、お金を稼ぐことではなく、施設の維持を前提としながら、何らかのかたちで地域に貢献したいというあらわれではないかと思えます。

これから価値観が多様化していく中で、このような人々を支える税金面の援助、優遇等が必要ではないかと思えます。

（九州地域計画研究所 おおいし ようこ）

ハウステンボスの知られざる一面

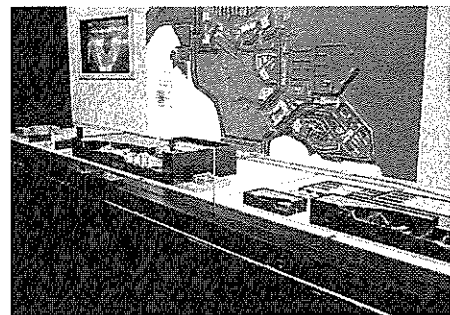
福井 秀樹

名古屋事務所の研修旅行でハウステンボスを訪れ、一般客の入れない特別な展示を見せてもらった。ハウステンボス建設の理念とその実現のための技術について説明がなされていた。ハウステンボスは決して単なるテーマパークではなく、人が生活する“街”を目指している。しかも自然との調和によって永きにわたり栄える“千年王国”を目指している。そしてそのためのまちづくりの手本がオランダのまちづくりであり、オランダの伝統技術を日本のハイテク技術でサポートすることによって、風土も生活様式も違う日本の中で有効なものとしているのである。

一般の人にも、この展示を見せてその理念と技術を知ってもらったうえで、まちとしての評価をしてもらうべきだと思う。

まだまだこのまちは生活全般をカバーできていないので制限つきではあるが、運河や船や建物を眺めながら、本を読んだり、会話をしたり、食事をしたり……それらをどんなまちでよりも心地よく感じてもらうことができたなら、ひとつの目標を達成したといえるのではないだろうか。

（名古屋事務所 ふくい ひでき）



中水道システムの展示

新刊旧刊書評紹介

日本都市問題会議関西会議編 都市文化社

京都・大阪・神戸からのアプローチ 『都市の未来』

紹介 石本 幸良

日本都市問題会議関西会議の活動

昭和53年に新しい時代の都市問題を研究し討議することを目的に東京で「日本都市問題会議」が設立され、その関西会議として57年に発足しました。会員は京阪神三都市の行政メンバー、学者、コンサルタント等により構成され、大都市問題をテーマに2年間の計画表を立ててその期間を活動の区切りとして、例会と現地見学会の活動を続けております。会場は三都市が持ち廻り、世話役も事務局も2年交代の基本ルールの中で、昨年10周年を迎え、現在の会員数は約150名に達しております。

これまでに神戸、大阪、京都の三都市持ち廻りのそれぞれの2年間の活動記録が『都市の時代』『都市の復活』『都市の魅力』の三冊として発行され、この『都市』シリーズが関西会議全体の活動の歩みとなっています。

『都市の未来』の発行

平成2・3年度は、二巡目に入った神戸の担当により、それまでの6年間に及ぶ大都市が抱える問題点の分析の成果を踏まえて、21世紀の大都市像を見据えつつ、今後の都市問題を展望しようと試み、基本テーマを「大都市の未来」と掲げました。例会における具体的な内容としては、都市産業論、大都市制度論、都市経営の方策、インナーシティ再生の方途、都市の土地政策などを中心に、都市文化論、都市型観光、消費者問題、地域医療システム、都市再開発論、大阪ベイエリアの将来など多岐にわたる問題をとりあげました。

この2年間の成果をまとめてシリーズ4冊目となる『都市の未来』が発行されました。21世紀を間近に控えて、三つの大都市が取り組もうとしている都市



政策が随所に表現され、都市の未来をよりよい方向に導くために、確かな未来像の構築と、現時点でなすべき適切な取り組みの指針を提示する必要性が浮かびあがっていると感じております。

私事になりますが、私の例会報告内容も収録していただいております。発行されてすぐに、大阪の人からご意見のお葉書をいただいたことにびっくりするとともに、感謝しております。

4・5年度の関西会議の活動

平成4・5年度は京都が担当で『都市のグランドビジョン—21世紀の関西都市圏』を基本テーマに活動が開始されております。弊社で事務局をしておりますので、ご意見やお問い合わせがありましたら、ご連絡いただければと考えております。

(京都事務所 いしもと ゆきよし)

まちかど

電柱の緑化？

三木 健治

必要悪とされている既存市街地の電柱は現状のままでよいのだろうか？そんな問いに答えてくれるような事例を紹介します。

写真の出雲市今市町の旧街道沿いでは、地元住民の発案で約200mにわたって電柱につたをはわせて電柱自体を緑化しています。剪定、水まきなどの手入れは、すべて地元住民の手で行われており、地元住民の「景観は自

分たちでつくっていくものだ」という考え方がうかがい知れます。

このような運動に対し、一昨年には出雲市の景観賞が与えられ、それとともに、今後出雲市では電柱の許可制の広告も一切行わないと決めました。また、電柱をつたで覆ったおかげで、けばけばしいビラが貼られるようなことも無くなり、貼ったり、剥がしたりのイタチごっこもなくなったそうです。

電柱を緑化したおかげで、今まで仕方無く裸の電柱にオシッコの跡を残していた地元の犬も喜んでいてることでしょう。

(京都事務所 みき けんじ)



アルパック (株)地域計画 建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本 社	〒600 京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82 (大和銀行京都ビル6階)	TEL (075)221-5132(代)
京 都 事 務 所		FAX (075)256-1764
大 阪 事 務 所	〒540 大阪市中央区城見1-4-70 (住友生命OEPプラザビル15階)	TEL (06) 942-5732(代)
		FAX (06) 941-7478
名 古 屋 事 務 所	〒460 名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 (ツボウチビル2階)	TEL (052)962-1224(代)
		FAX (052)962-1225
東 京 事 務 所	〒160 東京都新宿区新宿2-5-16 (霞ビル401号)	TEL (03)3226-9130(代)
		FAX (03)3226-9560
㈱九州地域計画 研 究 所	〒810 福岡市中央区天神1丁目15番1号 (日之出ビル6階)	TEL (092)731-7671(代)
		FAX (092)731-7673
㈱アルパックイン ターナショナル	〒540 大阪市中央区谷町1丁目5番7号 (ストークビル天満橋10階)	TEL (06) 943-7016
		FAX (06) 943-7026
㈱都市居住文化 研 究 所	〒604 京都市中京区東洞院通六角上ル 三文字町225 (朝陽ビル4階)	TEL (075)252-2231
		FAX (075)252-4417